国語

〈注　意〉

1 問題は 1 から 4 までで、16ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。

2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。

3 声を出して読んではいけません。

4 答えは全て解答用紙にＨＢ又はＢの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。

5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、、や。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。

6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。

7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。

8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい。

9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 世の中の毀誉を超越して所信を断行する。
(2) 予選を勝ち抜いたチームが全国大会で覇を競った。
(3) 最後まで諦めないで研究を続けよう。
(4) 相手を嘲るような光が彼の目に漂っていた。
(5) 災害に備えてキュウゴ班を結成する。
(6) 実に的をイた指摘だと感心した。
(7) このボールは合成ヒカクでできているそうだ。
(8) 航空機のソウジュウシを目指して努力する。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

風が少しあるらしい。A やわらかい空気の玉を抱いてわずかにふくらんだ枝葉の隙間から、蒼い空が見え隠れしている。薄紫に染まった小さな花々が、左右にひろがった枝のなかほどで、清楚な飾りのように輪をなしていた。甘い匂いが鼻先をかすめた。たしか去年も、工事が始まる前におなじ匂いを嗅いだことを思い出す。秋になるとこの木には緑の丸い実がなって、それがだんだん黄色くなり、ほおずきみたいなしわがよる。現場の様子を見に通っていたとき、妻は懐かしがって息子といっしょに落ちていた実を拾い集め、新しい家ができたらどこかに飾るんだと、ガラス瓶に入れて大切にしていた。つい昨日のことのようだが、この家に移ってもう二カ月になる。

日曜日の朝になると、長い廊下のような広縁に面したガラス戸を開け放ち、家の空気を入れ替える。深い庇を伸ばしてあるので、多少の雨なら濡れることもない。椅子を出して腰を下ろし、新聞を読んだり、庭の隅にある樹を眺めたりする。地面に近いところで暮らすことが、こんなにも心地よいとは思わなかった。心の足腰が安定して、五感が鋭くなる。なにより、音がよく聞こえるようになった。聴こうとしていなかった音が、自然と耳に入ってくるようになったのだ。

――いい匂い。

振り向くと、妻が立っていた。

――居間まで流れていくのか。

――ここに来たら、匂ってたの。

――そうか。仕事は片づいた？

週明けの会議のための資料を、ダイニングテーブルのパソコンで準備していたのだ。

――いま送ったところ。だから出てきたの。ひと休み。

――あいつは？

――寝ちゃった。

こちらを見ないで、けれど明るい声で妻は答えた。

――朝から学校の友だちと遊んで、疲れたみたい。

――あまり寝かせないでくれよ、夜眠らなくなる。変な癖がつくと困るし。

――じきに起こすから。お昼いっしょにつくる約束してるの。

このところ、息子は料理に興味を持つようになった。料理をしているあいだも、母親といっしょにいたいということなのだろう。妻はこちらに移ってから在宅勤務にしてもらって、週に一度、所属部署の会議に出ていく以外は家にいる。あいにく子どものほうは学校に行っているので、たっぷり甘えられるのは日曜日だけなのだ。

妻はじっと動かず、まっすぐ木のほうを見つめて、なんだか子どもの頃より濃くなった感じがする、とつぶやいた。

——なにが。

——匂いが。あの木の、花の匂い。

——そりゃ、木じたいが大きくなって、花が増えたからだろ。

——かもしれないけど、花の量とは関係ない気がする。むかしは、こんなふうに感じなかったもの。

屋根の軽い勾配に沿って切り取られた二つの大きな*トップライトから、熱だけうまく吸いとられた陽光がリビング・ダイニングをまんべんなく照らしている。キッチンのガスコンロの前に妻と息子が、こちらに背を向けて仲よく並び立っている。

——もう少しで沸騰するよ。

深鍋をのぞきながら、妻が言う。

——そろそろ用意して。

息子は母親の左隣にまわって、調理台に置かれた電子秤でパスタを量る。

——ひとり百グラムだからね、三人で何グラム？

——三百。

——正解！

妻は踏み台に立った小さな助手に次の手をうながす。(1)こちらからは見えない妻と息子だけの作業を、想像のなかで追う。息子は片手で握れる分だけパスタを掴んで、母親に教えられたとおりタオルを絞るみたいにぎゅっと絞ってから、ぱっと手を離す。ときどき割り箸をパスタに見立てて、水を張った鍋におなじ格好で何度も練習しているのを私は知っていた。今日はうまくいって、花のように美しく開いただろうか。それともまっすぐ沈んでしまっただろうか。ともあれ、絞って放すあのしぐさができれば、当人は大いに満足なのだ。オリーヴオイル、*ヴィネガー、黒胡椒で和えた胡瓜とサラダ菜のボウルが置かれたテーブルで、冷えたビールを口にする。以前のマンションの台所は、リビングと振り分けられていたから、こんなふうに料理をしている姿すら見ることができなかった。

——時間、お願い！

妻がこちらに叫ぶ。大鍋の横で煮えている、にんにくの効いたトマトソースの匂いが空き腹を刺激する。三分、五分、七分。壁時計を睨んだまま、引き揚げるべき時を私は伝えた。

ガラス戸の向こうに、緑豊かな木の枝の一部が見える。この家は平屋で、東側にある長辺が広縁になっており、部屋と庭に面した両側がガラスの引き戸による大開口部になっている。晴れた日は、屋内にたっぷりと空気を流すことができる。雨の日には、庭側の戸を閉じて、板敷きの広縁で子どもを遊ばせることができる。

以前住んでいた地上八階の部屋からは、幹線道路を隔てたおなじくら

いの高さの建物しか目に入らなかった。二重サッシの窓はほぼ閉めたままで、アスファルトの谷底を走る車の音も外気も入ってこなかった。手狭ながら環状線の内側にあり、皇居近くにある私の職場まで地下鉄で一本、妻の会社へも一度の乗り換えで通うことができるめぐまれた立地と、将来子どもができたときの教育環境も考慮して借りたマンションだった。

妻の職場は外資系のＩＴ企業で、社内に託児所を設けていた。啓太が生まれて産休が終わり、私のほうの育児休暇も使い切ったあとは、安心してそこに預けることができた。幸い、幼稚園も近くの評判のいいところを見つけて、送り迎えには苦労しなかったのだが、その先を考える段になって迷いが生じた。調べれば調べるほど、なにが最良の選択なのかがわからなくなってきたのだ。息子の将来を考えると言いながら、いつのまにか、つまらない世間体に気をとられていたのかもしれない。こだわっていないふりをしながら、心の底ではいつも同僚や友人たちの価値観とたたかって、背伸びをしていたのである。

義母からの電話で、ご近所の、昔から知っている人が、古家つきの土地を売ることにしたらしいと知らされたのは、ちょうどその頃のことだった。いつもの近況報告の電話のなかで、ついでのように出た話だったのだが、妻は売り主の名を聞いてすぐに反応した。

――それって、あの、大きな*センダンの木がある家？

(2) 電話を切ったあと、妻は少し興奮気味にその木の話を語りつづけた。センダンとは「*栴檀は双葉より芳し」のセンダンなのか。妻は、おなじかどうか知らないけれど、小学校の通学路の途中にあった家で、秋によく実を拾わせてもらった、枝のひろがり方がとてもきれいな、あの近辺でいちばん好きな木だったと言う。まさかこんな古い記憶から話が進んで、自分たちがその土地を買い、木を残して家を建てることになろうとは、夢にも思っていなかった。

何度も何度も話し合って、私たちは結論を出した。これは人と比べての行動ではない。(3) 親が住みたい場所で楽しく暮らす姿を見せたほうが、右左を気にして窮屈なのをごまかしているより、ずっと子どものためになる。それに、妻の実家に近いというのは、小さな子どもを抱えている私たちにとっても、ひとり暮らしの義母にとっても心強いはずだ。

新しい家を建てるに際して、妻は平屋にこだわった。平屋でなければ、あのセンダンの木の姿が生きないとまで言うのである。私のほうは、コンクリート打ちっ放しの、箱形の二階建てで、外からは見えない採光を兼ねた庭が軽やかな光の空間を演出しているという、建築雑誌でよく見かけるほとんど定番のような家に多少の憧れがあった。しかし、つてを頼んで紹介してもらった同年代の建築家は、現地を見るなり、ああ、ここには、平たい家を平たくしない空気がありますねと、即座に妻の案を採用したのだった。

――きれいねえ。なんだか屋形船みたい、と義母が言う。

陽が落ちてから、私たちは庭の木の下にテーブルを出して、義母が買ってきてくれた、妻の好物のみたらし団子を食べながらお茶を飲んでいた。B 広縁に面した三つの部屋の、暖色系の明かりをすべて灯し、カーテンも開け放って庭から眺めると、たしかに闇に浮かんでいる船のようで、あるはずのない波の音まで聞こえてくる。酔いのせいなのかそうで

ないのか、ぼんやりした頭ではもう判断がつかない。

――ほんとにびっくりしたわよ、と義母は笑った。まさかここを、あんたたちが買って、家を建てるなんて。

そのとおりだった。きっかけになったのは頭上に枝を伸ばしているこのセンダンの木だが、お世話になった棟梁によると、ふつうは差し障りがあって庭に植えないものなのだそうだ。おまけに成長が速くて、どんどん伸びてくる。伐りたいと思っても、根を絶やさないかぎりどうしようもない。C けれど妻は、逆に言えば生命力があるってことだし、葉っぱは虫除けにもなるから、木の家にはむしろいいのだと、まるで問題にしなかった。実際、あの子はまちがいなく、この木から力をもらっていた。以前とは比較にならないほど血色がよくなったし、表情が明るくなった。

それは妻もおなじだった。通勤の疲れがなくなっただけではない。なにか、べつの力が働いているようにさえ感じられるのだ。そう言えば、こちらに移る前は、疲れるといろんなにおいを受け付けなくなると蒼い顔で話していた。いい匂いだなんて言葉を口にすることじたい、ずいぶんひさしぶりだった。妻の横顔に目をやる。母親ではなく、父親似らしい細長い顔が、明かりに照らされてふっくらとやわらかみを増している。食欲もずいぶんあるようだ。ふと、思いあたる。啓太ができたときも、たしかこんな感じだった。義母が遊びに来るとき、今日のように和菓子屋でみたらし団子を買ってきてとめずらしく自分から頼んだりしたのも、おなじ頃だったはずだ。

D ――ほんと、きれい。こんなにたくさんガラスの窓にして、よかったわねえ。河に浮かべたいくらい。

義母の言うとおりだった。贅沢だとは思ったが、妻とふたりで決めたことだ。(4) これからは、この平たい船を頼りない日々に浮かべて生きていこう。頭上で甘い匂いを放っている大木の幹に、丈夫な*もやい綱を結ぼう。なにが起きようとも、安易な風にはけっして流されたりしないように。

（堀江敏幸「平たい船のある風景」による）

〔注〕 トップライト――光を取り入れるために、屋根に取り付けた窓。

ヴィネガー――西洋料理で使う酢。

センダン――暖かい地方に生える落葉高木。

栴檀は双葉より芳し――（栴檀が双葉のときからよい香りを放つところから）立派になる人は、幼い頃から優れたところがあるものだ。

もやい綱――船を岸につなぎ止める綱。

〔問1〕(1) こちらからは見えない妻と息子だけの作業を、想像のなかで追う。とあるが、このときの「私」の様子を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　こちらからは二人の後ろ姿しか見えないが、妻と息子が仲良さそうに料理をしているのだろうと想像して、自分が参加していないつまらなさを感じている様子。

イ　こちらからは二人の後ろ姿しか見えないが、息子が何度も割り箸で練習していた作業がうまくいっただろうかと想像しながら、休日のひとときを過ごしている様子。

ウ　こちらからは二人の後ろ姿しか見えないが、息子が水を張った鍋に向かって何度も練習していた姿を思い浮かべ、今日は是非成功してほしいと期待し心から応援する様子。

エ　こちらからは二人の後ろ姿しか見えないが、母親に教えられたタオルを絞るような動作に息子が緊張して挑戦する姿を想像し、心配そうに息をひそめている様子。

〔問2〕(2) 電話を切ったあと、妻は少し興奮気味にその木の話を語りつづけた。とあるが、妻が「少し興奮気味にその木の話を語りつづけた」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　実家近くの大好きだった木のある土地が売りに出されると聞いて、「梅檀は双葉より芳し」のセンダンではないかと気付き、幼時の記憶が一気によみがえったから。

イ　実家近くの大好きだった木のある土地が売りに出されると聞いて、美しく枝の広がった思い出の木が切られてしまうのではないかと心配になってきたから。

ウ　子どもの頃にとても好きだった木のある土地が売りに出されると聞いて、その土地に自分たちが是非住んでみたいものだという強い願望が生まれたから。

エ　子どもの頃にとても好きだった木のある土地が売りに出されると聞いて、思いがけない話に驚き興味を抱くとともに、懐かしい思いが込み上げてきたから。

〔問3〕(3) 親が住みたい場所で楽しく暮らす姿を見せたほうが、右左を気にして窮屈なのをごまかしているより、ずっと子どものためになる。とあるが、「右左を気に」する様子が最もよく読み取れる連続する二文の箇所を本文中から探し、その初めの三字を書け。

〔問4〕(4) これからは、この平たい船を頼りない日々に浮かべて生きていこう。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 美しい船のような住まいに身を置き、自分たちで決めた生き方を大事にしながら、確かには見えない明日に向かって家族とともに生活していこうという覚悟を確かめる気持ち。

イ 分不相応な住まいを持ったことから、将来への不安がぬぐえないでいるが、揺れ動く日常を乗り切ってゆく船に見立てた家での生活を楽しもうと自らに言い聞かせる気持ち。

ウ 転居を機に未来への展望のなかった生き方を見つめ直し、庭の木のもつ神聖な力を頼りに、平たい船のような家ではあるが地に足を着けた生活をしようと決意する気持ち。

エ 船のような住まいを義母も気に入ってくれたので、自分の憧れとは異なる平屋であることは我慢して、あてのないその日その日の暮らしを平穏に続けたいと切望する気持ち。

〔問5〕 本文中の表現について述べたものとして適切なものを、次のうちから選べ。

ア A やわらかい空気の玉を抱いてわずかにふくらんだ枝葉の隙間から、蒼(あお)い空が見え隠れしている。では、物語の舞台を提示するにあたり、人間以外のものを人になぞらえる擬人法を用いて、転居前に見た空と転居後に見える空の表情の劇的な変化が生き生きと表されている。

イ B 広縁に面した三つの部屋の、暖色系の明かりをすべて灯(とも)し、カーテンも開け放って庭から眺めると、たしかに闇に浮かんでいる船のようで、あるはずのない波の音まで聞こえてくる。には、幻を見た体験が詳細に描かれ、非現実の世界への入り口が生々しく表されている。

ウ C けれど妻は、逆に言えば生命力があるってことだし、葉っぱは虫除(むしよ)けにもなるから、木の家にはむしろいいのだと、まるで問題にしなかった。には、旧習に縛られず欠点を長所と捉えて木を残そうとしている妻の様子が、その言葉遣いを引用して巧みに表現されている。

エ D ――ほんと、きれい。こんなにたくさんガラスの窓にして、よかったわねえ。河に浮かべたいくらい。では、義母の話の中で、建てたばかりの家をガラス細工の船にたとえて語らせることによって、平たい家のもつはかなげな美しさが強調して表現されている。

〔問6〕 本文の内容や登場人物について述べたものとして適切なものを、次のうちから選べ。

ア 在宅勤務の仕事をして一息ついた妻が、「私」の問いかけに対して、こちらを見ることもなくそっけない返事をするなど、二人の間柄が変化し始めたことを「私」は感じ取って不愉快になった。

イ 母親と一緒にいたい気持ちから息子は料理に興味を持ち、日曜日によく二人で練習していたところ、妻は息子の料理につきあっているうちに感覚が鋭くなり、センダンの木の大きな力を感じ始めた。

ウ 近くに住むことになった義母は、娘たちが建てた家のデザインが斬新で華やかであることにとても驚き、何度もその姿を褒めながらも、若い感覚についていけずにやや居心地の悪い思いをしている。

エ 新しい家を持つ契機となったセンダンの木の不思議な力を感じ取っている「私」は、妻の表情の変化や行動から、子どもを授かったときのことを思い起こし、新たな幸せな出来事のきざしを感じている。

---

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（1～15は段落番号である。＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

1 自由という概念は、その対立概念である不自由との相互依存性だけでなく、他のもろもろの価値とのバランスと順序付けのなかで考慮されねばならない。言い換えると、自由を独立の概念として論じることには限界があるだけでなく、そこには価値の＊多元性と切り離せない問題が含まれているのだ。単一の明晰（めいせき）な概念と思われている学術用語も、多くの論者が使用するとその意味が曖昧になることは避けられない。この点を反省し、自由の問題に改めて取り組んだのは20世紀最高の思想家の一人、アイザイア・バーリンであった。

2 バーリンの講演「二つの自由概念」は、その後の思想史にひとつの飛躍を与える視点を供するほどに重要な意味を持つものであった。そのなかで、「200以上に及ぶ」と言われる多種多様で錯綜（さくそう）した自由の定義の中から、(1)二つの自由を区別することが重要だとバーリンは指摘し、人間にとって、いくつも存在する価値は多元的であり、複合性と不両立性があることを明らかにしたのである。

3 政治体制的に見ると、バーリンの区別する自由という概念の第一の意味、すなわち「消極的自由」は、次のような問いに対する答えの中に含まれる。「主体が、いかなる他人からの故意の干渉も受けずに自分の欲（ほっ）することをなし、自分のありたいものであることを放任されている、あるいは放任されているべき範囲はどのようなものであるか」。他人によって干渉されない範囲が広がるにつれて、その人の自由も拡大され

る、そういう自由だ。言い換えれば、私生活の範囲と公権力の範囲のどこに境界線を引くのかという問いとして立ち現れる。人間の自由な行動の範囲は法律によって制限されねばならないが、どうしても侵されてはならない最小限の個人的自由の範囲が存在するはずだ。さもないと、自由を放棄することは、善や正義を追求するという人間本性の一部ないし全部を否定することにつながる。「干渉からの自由」、「権力の強制からの自由」であり、「〜からの自由」である「消極的自由」は、英国近代史における自由への戦いのなかで育まれた。少なくとも古代世界では、個人の自由という意識は近代よりはるかに希薄であったのではないか。

4 第二の意味は、「積極的自由」と呼ばれる。それは「ある人が、あれよりもこれをすること、あれよりもこれであることを決定できる統制または干渉の根拠は何であるか、また誰であるのか」という問いへの答えの中に含まれている。それは、独立自尊としての自由、自己決定の自由であって、「〜からの自由」ではなく、「何をすることが出来るか」を問うている。敢えて対照的にレッテルを貼れば、A ルソー以来のフランスにおける社会思想の伝統の中で育まれた自由と見ることができよう。

5 リベラリズム*の思想を探求する社会科学の分野では、バーリンの意味での第一の自由、すなわち「消極的自由」、より具体的には「国家権力による干渉からの自由」をめぐる問題を中心に論じられて来た。

6 たしかにわれわれは、行動が他人によって干渉されない程度に応じて自分は自由であるか否かを判断する。たとえば経済活動を例にとると、できる限り政府の干渉と強制があってはならないと考え、規制は緩和されなければならないという一般論が、正論とみなされるようになった。ひとつには、国家が市場に介入して市場取引の自発性や多様性が作為的にゆがめられれば、経済社会全体が資源の大きなロスを被る、と功利主義的に考えるからだ。市場システムに関するこの「大命題」は、すでに18世紀のヨーロッパ知識人の間では認識されていた。

7 自由市場で成立する価格が、合理的な経済行動にとって必要不可欠な情報を提供しつつ調和と秩序をもたらすという不思議は、古代ギリシアのポリス*（都市国家）での市場取引を観察する哲学者も気づいていた。しかし功利主義的な視点から、「自由」が社会的な厚生を高めるという考えが、科学的認識として確立するのは18世紀のヨーロッパにおいてであった。

8 (2) 国家による干渉と強制が望ましくないと考えられる、もう一つの理由がある。それは、国家という単一理性が与える知識によって人々が考え行動するのではなく、多くの人々が関わる「思想やアイディアの市場」を通したほうが、予測しがたい未来に対して「真理」により近づきやすいという点にある。この考えは古代ギリシア人が発見した、真理への、迂遠*ではあるがもっとも確実な接近方法であった。古代ギリシア人はアゴラ*（広場）での論争と商取引を類比*的にとらえ、市場を「発見のための装置」と考えた。

9 ポリスが、真理だけではなく、美や善に関しても、発見と洗練のための「装置」として働いたと哲学者田島正樹は指摘する。ポリスの社交生活は、洗練されたもの、良きものを選別する力を持っていた。例えば、ファッションは厳しい審美眼*によって選別され、淘汰*される。見苦しい行動は誰にも真似されなくなる。そして悪徳も少なくとも表面には

現れない。隠れて生きることを望まない古代ギリシア人は、ポリスという装置によって、自然に徳の習慣へと導かれたのだという。

10 さまざまな思考実験や生活の多様性は、前人未踏の、あるいは人それぞれの個性にあった「新しい方法」をもたらす重要な契機になる。自由な経済競争が社会を豊かにするという主張の根拠のひとつも、この自由競争のもつ「発見の機能」にある。自由な実験や競争を許さないで、単一理性の提供する知識のみを強制すると、さまざまな可能性の扉を閉ざしてしまうことになるのだ。

11 経済競争も、誰が一番すぐれているか、誰が一番上手にこなすかということを、予(あらかじ)め知ることができない場合に用いられるすぐれた「発見のための手続き」(*ハイエク)として機能する。競争によってはじめて、最もすぐれた経済生産の方法が発見されるのだ。知識が不完全な経済社会では、現実にどの方法がある条件下で費用最小の生産方法であるかが前もってわかっているケースはない。むしろ競争の過程を通して、はじめて最適な生産技術が徐々に発見されていくのである。

12 しかし競争は、ある具体的なケース(たとえばスポーツなど)に関して、誰が一番よくやったかを示すことはできるが、競争参加者各人が、自分の潜在的能力そのものを100パーセント出し切ったかどうかを判別することはできない。競争は最も効果的に新しい知識や事実を学ばせることはあるが、トップに立つ者は、彼を追いあげる者が近づいた時にしか、水をあけようとしないという点では、潜在的な力の完全なる現実化に寄与しないこともある。いずれにせよ、B競争というのは科学の実験のような性格を帯びたものと言えよう。競争はまずもって「発見のための手続き」なのである。

13 経済問題の根本は、幾億幾千万という人々の頭の中に散らばって存在する知識や技能、あるいはそれらを獲得する機会を、いかに効率よく使用するかという点に存する。社会の中に存在するこれら知識や技能は、単一の主体がその全体を把握・所有しているのではないから、それをどう利用するかが最大の経済問題となる。このような視点に立つと、競争は、人々が知識を獲得し交換するプロセスと捉えることができ、すべての知識がはじめから単一の計画主体(例えば中央経済当局など)に与えられているとみなすことは、社会認識としては事実になじまない。財の質や人々の*選好、あるいは効率のよい生産技術は、競争プロセスを通して徐々に発見されていくのである。

14 一般に*一元論者が、社会の問題にも「科学的に決定的な」回答を原理的に見出し得るとみなすのとは対照的に、こうした考えは人間行動における無意識的な要素の存在や知識の不完全性を強調するという点で、多元論と名付けられよう。個人の生き方としても、「自分はこう考える」ということを過度に強調すると、他の可能性を排除してしまうだけでなく、過去の知恵への敬意を弱め、他人の考え方を軽視することになる。一人の人間の知恵など、社会全体に蓄積されてきた知恵の総量に比べれば、お粗末なものなのだ。だからこそ、同時代の他者の考えを抑圧せずに、ゆっくり耳を傾けなければならない。死者(過去)の言葉を振りかえらなければならない理由もここにある。C古きをたずねることが大切であり、「自分はこう考える」と軽々に、そして頑固に主張し、己の「独創性」を強調することは愚かな幻想を生みかねない。

15 また、人間というものの存在目的が作為的に狭小化され、大多数の人間がその単純な目的のために働く社会より、人間が趣味と意見を異にし、議論し、攻撃し、拒否しうると同時に、それでもなお「共存する」という知恵を失わない社会を「善し」とする考えがここにはある。こうした姿勢のよって立つところは、人間の知識というものは原則として不完全であること、たえず誤る可能性があり、普遍的に通用するような唯一の真理を現在手にしている人も国民も存在しないという認識だ。だからこそ、われわれの信念というものはいかに強くとも、新しい実験や議論によって常に修正を受ける性質のものであることを肝に銘じなければならない。D知識の扉を閉ざすことは、長く「誤謬」に留まることに等しいのである。

（猪木武徳「自由の思想史」による）

〔注〕多元――多くの要素があること。
リベラリズム――自由主義。
ポリス――古代ギリシアの城壁をめぐらした都市として構成された小国家。
迂遠――遠回りしているさま。
アゴラ――古代ギリシアの都市国家の公共広場。
類比――くらべること。
審美眼――美を識別する能力。
淘汰――不必要なもの、不適当なものを取り除くこと。
ハイエク――20世紀オーストリアの経済学者。
選好――他よりもあることを好むこと。
一元論――すべての事実や現象をただ一つの原理で説明しようという考え方。
誤謬――まちがえること。

〔問1〕(1)二つの自由を区別することが重要だとバーリンは指摘し とあるが、「自由」やその「区別」について説明したものとして、本文の内容に合致するものを、次のうちから選べ。

ア 「消極的自由」と呼ばれる「第一の意味」の自由は、人が外部から干渉されない範囲の自由を意味し、そこでは公権力によって侵されてはならない個人の自由の範囲が問われることになる。

イ 「積極的自由」と呼ばれる「第二の意味」の自由は、何が出来るかという個人の自己決定の自由を意味し、そこでは権力者が干渉できる範囲についての法的根拠が問われることになる。

ウ 「消極的自由」は、主体が他人から干渉されて不自由な生き方を強いられることを意味し、「積極的自由」は、主体が他人から独立して制約なく生きることを意味するものである。

エ 「二つの自由」は、自由の多種多様な定義の中からバーリンが区別したもので、対立概念の「不自由」との相互依存性を考慮しつつも、それぞれ独立の概念として論じるべきものである。

〔問2〕(2) 国家による干渉と強制が望ましくないと考えられる、もう一つの理由がある。とあるが、

① 筆者が述べた一つ目の理由にあたることを次のように説明するとき、［A］・［B］に入る適切な言葉を本文中から探して文を完成させよ。なお、［A］は、適切な五十字以上五十五字以内の箇所を探して初めの五字を書き、［B］は適切な五字の言葉を抜き出して書け。

［A］という［B］な考え。

② 筆者が述べた「もう一つの理由」として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自由な実験や競争が国家により制限されると、新たなアイディアが生まれなくなり、美や善を求める芸術や哲学にしか豊かさのより所がなくなって社会は衰退するから。

イ 国家という単一理性の提供する知識のみを用いようとすると、求める真理の発見までに時間がかかり、予測のつきにくい未来への対応が遅れることになるから。

ウ 古代ギリシアでは国家による干渉と強制によって真理に近づき経済活動を発展させたが、自由の概念が浸透してきた近代では通用しない方法であるから。

エ すぐれた方法は自由な実験や競争によって発見されるのであり、国家による干渉や知識の強制があると、真理の発見への道が遠ざけられてしまうことになるから。

〔問3〕 本文の段落の構成について説明したものとして適切なものを、次のうちから選べ。

ア 導入の[1]・[2]の段落を受けて、[3]・[4]の段落では二つの自由についての概念や成立過程を説明し、[5]・[6]の段落では、両者を対比した上でどちらに価値があり有用であるかを結論づけている。

イ [9]の段落では、[8]の段落で示した考え方に反論するために、その根拠となる古代ギリシアにおける具体例を挙げて説明し、[10]の段落から始まる新たな視点からの論述につなげている。

ウ [10]の段落は、人々に発見をもたらす競争に注目して記述されているが、競争について補足的に説明した[12]の段落を間に挟んで、[11]・[13]の段落ではその効果や必要性を述べている。

エ [14]の段落と[15]の段落は、話題を転換して個人の生き方について述べているが、両段落では対照的な見方が述べられており、今後の社会ではどちらが現実的かを読者に問いかけている。

〔問4〕 本文の内容について述べたものとして適切なものを、次のうちから選べ。

ア 筆者のいうA「ルソー以来のフランスにおける社会思想の伝統の中で育まれた自由」と対照的なレッテルとは、「古代世界において近代よりはるかに希薄であった個人の自由」である。

イ 筆者のいうB「競争」というのは科学の実験のような性格を帯びたものとは、経済社会で競争の過程を経て最適な生産方法が発見されることが科学の実験と似ていることを表したものである。

ウ 筆者のいうC「古きをたずねること」とは、長い間社会に蓄積されてきた過去の知恵や言葉を重んじ、そこから逸脱することなく個人の生き方を決めていこうとする考えのことである。

エ 筆者のいうD「知識の扉を閉ざすこと」とは、公権力が社会秩序を保つために経済活動を始めとして人々への干渉や強制を行った結果、人々の思考力を弱めてしまうことである。

〔問5〕 この文章でいう「一元論」と「多元論」の考え方について、あなたはどちらを支持するか。あなたの考えとその理由を、自分自身の体験や見聞を含めて二百字以内で書け。ただし、書き出しの一文で、どちらを支持するかを明記すること。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

---

4 次のAは「平家物語」灌頂巻の「大原御幸」についての文章であり、［　　］内の文章は本文中に引用されている「大原御幸」の現代語訳である。また、BはA文中にでてくる「朧月夜」の歌詞である。これらを読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

壇ノ浦でついに平家を滅ぼした源氏。彼らは三種の神器のうち神鏡と神璽は奪還しましたが、宝剣は海に沈んだまま発見できませんでした。これがあとの義経の悲劇にもつながります。

生け捕られた平家側の人間は八十名以上。また梶原景時の讒言で頼朝と義経が決裂。追われる身となった義経は奥州に下っていき、ここからまた新たな物語が生まれます。能にも『船弁慶』など、義経の悲劇を扱った作品がいくつもあります。

生け捕りにされた平家の人々の中には女性たちもいて、そのひとりが、清盛の娘で安徳天皇の母の建礼門院でした。彼女は天皇と二位殿の入水を見て自らも海に身投げするのですが、源氏側に助けられてしまいました。

建礼門院はその後出家し、京都大原の寂光院という尼寺で、平家一門の菩提を弔う生活を始めていました。そこに後白河法皇が訪ねてくる。その様子を語るのが、灌頂巻の「大原御幸」です。

内容を見る前に、『平家物語』の中の後白河法皇の人物像を確認しておきたいと思います。彼は、平家に翻弄されつつも、実は裏でいろいろ

と暗躍[1]した人物だと言えます。平家追討の院宣*を出したかと思えば、木曾義仲追討を指示し、最後には子飼いの臣下のように使っていた義経追討をすら命じていて、頼朝からは「日本一の大天狗」と呼ばれたりもしています。こうしていろいろな人を翻弄しながら彼がやりたかったことは、院政の復興だったのではないでしょうか。平家全盛の前までは、譲位したあとの上皇が実権を握る院政の時代でした。平家によってないがしろにされた院政を、後白河法皇はもう一度取り戻したかった。

しかし、平家が滅んでもそれを取り戻すことはできませんでした。平家滅亡後は源頼朝の時代になり、実質的な都は鎌倉。京都は名目上の都でしかありません。法皇にとっても決してハッピーとはならなかったそんな状況の中、お忍びで行われたのが大原御幸でした。

この段で注目したいのが、法皇の一行が寂光院に向かい、そして到着するところの風景描写[2]です。少し長くなりますが引用します。

遠山にかかる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるる。比は卯月廿日余の事なれば、夏草のしげみが末を分けいらせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覧じなれたるかたもなし。人跡たえたる程も、おぼしめし知られて哀れなり。

西の山のふもとに、一宇の御堂あり。即ち寂光院是なり。（略）庭の若草しげりあひ、青柳糸を乱りつつ、池の蘋浪にただよひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかかれる藤なみの、うら紫にさける色、青葉まじりの遅桜、初花よりもめづらしく、岸のやまぶき咲き乱れ、八重たつ雲のたえまより、山郭公の一声も、君の御幸をまちがほなり。

（灌頂巻　大原御幸）

遠山にかかる白雲は、散ってしまった花（花の雲）の形見のようである。青葉がちに見える桜の梢を見ては、もう花も散り青葉になったかと春の名残が惜しまれる。頃は四月二十日過ぎのことなので、夏草の生い茂った草葉の先をかき分けて入って行かれると、はじめての御幸なので、見なれておいでになる所もない。人の往来が全くない様子も、法皇の御心に察せられて、しみじみと感慨深い。

西の山の麓に一棟の御堂がある。すなわちこれが寂光院である。（略）庭の若草がいっせいに茂っており、青柳が風のために糸のような枝をなびかせ乱しており、池の浮草は波に漂い、錦を洗いさらしたのかと間違えられるほどだ。池の中島にある松にからみついた藤の花の紫に咲いた色も美しく、青葉にまじって咲く遅桜の花は、春初めて咲く花よりも珍しく思われる。池の岸の山吹が咲き乱れ、幾重にも重なる雲の絶え間から、鳴いて通る山郭公の声が聞えるが、その一声も法皇の御幸を待ち顔に聞える。

ここで描かれる景色には、心の風景が表現されています。日本語の文章には、景色を描写するだけで心情を表すということがよく見られます。私たちがよく知っている例として、[3]童謡の「朧月夜」を思い出してみましょう。「朧月夜」の歌詞には、一番、二番を通じて感情表現がひ

とつもありません。しかし私たちは、あの歌を聞いてやさしさや切なさといった何らかの心情を受け取ります。

それと同じように、ここに建礼門院の感情はひとつも書かれていません。しかし、たとえば「夏草のしげみ」というひとことからも、私たちはさまざまな心象を想像することができます。柿本人麻呂は、夏草を「思い萎える」ものとして詠いました。しおれた気持ちの象徴としての「夏草」が茂っています。旧暦の卯月廿日、初夏の空は明るい。世界は明るいけれど自分の中には空漠たる風景が広がっている。そんな心の内が想像できます。また(4)「池の浮草は波に漂い」からは、心にさざ波が立っているような状態も想像できるでしょう。(5)「八重たつ雲のたえまより」聞こえる「山郭公の一声」は、『古今和歌集』の歌々を思わせ、中空に鳴く郭公の虚ろな響きに、心の空しさを感じさせます。風景は、物語を聴く人に、登場人物の感情を押し付けることをせずに、聴く人のそのときの状況でさまざまな心情をそこに表出させます。

ここに書かれている景色は、建礼門院の心情であり、また法皇の心情でもあり、そしてこの物語を聴いている人の心の風景でもあります。ふたりのような壮絶な体験を実際にはしなくても、私たちはある程度の年齢になって自分の人生を振り返ったときにそんな心の景色が見えることがある。あるいはそのような経験がなくても、この物語を聴いたときに、そのような心情がふと湧きおこってくるときもあるでしょう。建礼門院と後白河法皇と、そしてこの物語を聴く人。(6)そうした三者のコレクティブ（集合的）な無意識は、感情表現ではなく、景色を描くことによって初めて共有されるのです。

かつて栄華を誇った平清盛の娘、そして国母（天皇の生母）でもあった建礼門院が、いまはこんなさびしい寺で不自由に暮らしている。法皇は世の無常を感じ、また建礼門院もこんな姿で法皇に再会することになろうとは……と涙を流します。

（安田登「平家物語」による）

B

「朧月夜」　高野辰之

一、菜の花畠に　入日薄れ
見渡す山の端　霞深し
春風そよ吹く　空を見れば
夕月かかりて　匂い淡し

二、里わの火影も　森の色も
田中の小道を　辿る人も
蛙の鳴く音も　鐘の音も
さながら霞める　朧月夜

（長田暁二「日本の愛唱歌」による）

〔注〕
梶原景時――平安時代末期から鎌倉時代初期の武将。
讒言――事実をまげ、いつわって人を悪く言うこと。
二位殿――安徳天皇の祖母。建礼門院の母。
菩提を弔う――死者の冥福を祈り、供養する。
院宣――院庁の役人が上皇や法皇の命令を受けて出す文書。
木曾義仲――平安時代末期の武将。

空漠――漠然としてとらえどころがないこと。
匂い淡し――ぼうっとやわらかに映っている。
里わ――里のあたり。

〔問1〕(1) 暗躍 とあるが、ここで用いられている「暗」と同じ意味の「暗」を含む熟語は、次のうちのどれか。

ア 暗雲
イ 暗記
ウ 明暗
エ 暗号

〔問2〕(2) この段で注目したいのが、法皇の一行が寂光院に向かい、そして到着するところの風景描写です。少し長くなりますが引用します。とあるが、引用された風景描写に合致しているものを、次のうちから選べ。

ア 法皇一行が大原にやってくると、遠い山々にはまだ桜が咲いており、まるで白い雲がたなびいているかのように見えた。
イ 法皇にとっては初めての大原御幸ではあるが、辺りの様子から、これまで多くの人が大原の里を訪ねているようだった。
ウ 寂光院の庭には芽生えたばかりの草が生い茂り、池に浮かぶ草は波に揺れて、まるで美しい模様の織物のようだった。
エ 寂光院の建物のすぐ横には藤棚があり、紫色の花が池の面に美しく映って、遅咲きの桜も満開であった。

〔問3〕(3) 童謡の「朧月夜」を思い出してみましょう。とあるが、Bの「朧月夜」の歌詞について述べたものとして適切でないものを、次のうちから選べ。

ア 八音六音の韻律の繰り返しからなる定型詩で、一番ではア段の音を多用することで明るく静かな雰囲気を漂わせているが、二番では主にエ段の音を用いて寂しい情感を表現している。
イ 一番では上空に向かう視線を取り入れて夕暮れの遠景を描き、二番では地上に広がる視線も取り入れて近景を描くことによって、情緒のある朧月夜を空間の広がりをもって描き出している。
ウ 一番では菜の花・霞・春風、二番では蛙・朧月夜など春を表す言葉を用いて、春の宵の田園に群生する菜の花とぼんやりかすむ月にいろどられた里の夕暮れの景色を美しく表現している。
エ 哀愁を帯びた暮色があたりを包み込んでゆくたそがれどきの春の田園を、一番では視覚表現を中心として、二番では辺りに広がる聴覚表現も含んで情趣豊かに描き出している。

〔問4〕(4)「池の浮草は波に漂い」からは、心にさざ波が立っているような状態も想像できるでしょう。とあるが、ここで「想像できる」心情の例として適切なものを、次のうちから選べ。

ア　我が子を失った今の状況を自分の運命だと受け入れて安らかに暮らそうとする建礼門院の心情。

イ　平家一門の冥福を祈って仏道修行に励みながらも、穏やかではいられない建礼門院の心情。

ウ　建礼門院と久しぶりの対面をしようと期待に胸を躍らせ興奮している後白河法皇の心情。

エ　院政復興を果たせず、みずからの不幸を思い絶望に沈んでいる後白河法皇の心情。

〔問5〕(5)「八重たつ雲のたえまより」聞こえる「山郭公の一声」は、『古今和歌集』の歌々を思わせ、中空に鳴く郭公の虚ろな響きに、心の空しさを感じさせます。とあるが、次のア～エの『古今和歌集』の和歌の中で、「郭公の虚ろな響きに、心の空しさを感じさせます。」という説明に最もよくあてはまる歌はどれか。なお、【　】内は現代語訳である。

ア　わがやどの池の藤波咲きにけり山ほととぎすいつか来鳴かむ
【わが家の庭の池の藤波が咲いた。山ほととぎすは、いつになったら来て鳴くのだろうか。】

イ　五月待つ山ほととぎすうちはぶき今も鳴かなむこぞのふる声
【五月を待つ山ほととぎすよ。はばたいて今すぐにでも鳴いてほしい。去年のあの聞き慣れた声で。】

ウ　いつのまに五月来ぬらむあしひきの山ほととぎす今ぞ鳴くなる
【いつの間に五月が来たのだろうか。山ほととぎすが今鳴くのが聞こえる。】

エ　夏山に鳴くほととぎす心あらばもの思ふ我に声なきかせそ
【夏山に鳴くほととぎすよ、おまえに心があるならば、もの思いをしている私に声を聞かせるな（よけいつらくなる）。】

（「新版　古今和歌集」による）

〔問6〕(6)そうした三者のコレクティブ（集合的）な無意識は、感情表現ではなく、景色を描くことによって初めて共有されるのです。を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　建礼門院や後白河法皇のそれぞれが心に抱えた深い思いは感情表現として言葉に描き出されてはいないが、聴き手は風景描写を通じて、その心の有り様に思いを致すことができる。

イ　かつての栄華から転落した建礼門院と失意の後白河法皇、それぞれの心情を表すのにふさわしい自然の景物を描き対比させることで、二人の心情の差異が聴き手に伝わってくる。

ウ　風景は、それを見る建礼門院や後白河法皇などの人物に心の奥深くの思いに気付かせるだけでなく、それぞれの思いを聴き手に伝え共感させる手掛かりとして働きかけるものである。

エ　それぞれの風物には日本文学の伝統の中で育まれて固定したイメージがあるため、聴き手はここでの風景描写を通じて建礼門院のみじめな心情や、後白河法皇の不本意な心情を理解できる。